

「幸いなるかな、ユリシーズのごとく……」

——人文地理学におけるネットワークと地域——

ジャン・ゴットマン

I 地域から抽象へ

III 地域の編み目

II 空間の組織化と分断

フランスの各教室で、幾世代にわたって暗唱されてきたジョアシャン・デュ・ベレーの有名な詩（ソネット）は、世界の地理的理解や、環境と個人との関係について、根本的なテーマを提起している。世界中を広く旅した者たち、国々の多様性とそれら相互の結びつきの複雑さを学んだ者たちの、ローカルな環境への深い愛着を、デュ・ベレーは詩に歌ったのである。

幸いなるかな、ユリシーズのごとく美しき旅をせし者、
幸いなるかな、かの騎士のごとく金羊毛を奪いし者、
知恵と分別に満ち、古郷ふるさとに帰りて、
生涯の残りの日々を家族の団楽まどいに打過せし者。

郷土への愛着、地域環境の魅力、これらはいつに変わらぬ民衆教育のテーマである。空間組織に対する人間の関心が、かくも矛盾に満ちたものでなかったならば、これらのテーマは詩人や地理学者の興味をこれほどまでに引きつけはしなかっただろう。一方において、出身地の親しんだ環境、狭い領域への深い愛着がある。しかし、他方では、水平線のかなたに隠されている未知の事物を知りたい、発見したいという強い欲求がある。このディレンマはまた、地理学者のディレンマであり、地理学思想上のディレンマでもある。すなわち、一方には地域があり、他方には全世界スケールでのネットワークがある。20世紀における地理学論争の中で、このディレンマこそはきわめて本質的であると筆者は考えている。

I 地域から抽象へ

第2次世界大戦後の数年間は、もろもろの社会科学にとって、大きな転換期であった。人文地理学も、この時期に根本的な転換を遂げた。それ以前、両大戦間の1920年～1940年に、地理学研究はすでに地域モノグラフィーの枠を大きく乗り越えていた。すなわち、人口増加と過剰人口、居住様式、農村および都市の集落形態、乾燥性と灌漑、天然資源の分布など、一般的かつ緊要なテーマが、地理学研究の主要な課題とされてきた。一部の地理学者は、データの分析に計量的な手法を適用し、数量的な指標によつて現象を記述することさえ試みた。エマニュエル・ドゥ・マルトンヌの乾燥示数、アルベ

ール・ドゥマンジョンの集落分散度示数などは、その好例であろう。また、19世紀の末から地理学者がよく用いてきた「人口密度」は、地理学および地域経済学で最も頻繁に使われ、またきわめて有効だった「数学」的指標である。人口密度は、土地面積と居住人口の関係を、明確に記述することを可能にした。1940年から1950年にかけての10年間は、現実の事象においても理論的な研究においても、人文地理学に新しい世界が開示された時期であった。1949年にリスボンで開かれた国際地理学会議では、いくつかの発表と討論が新しい潮流の顕在化を示したが、出席者の大半は、その当時準備されつつあった学問的革命に、気づかないままであった。

第2次世界大戦に続く10数年間は、社会・人文諸科学が、研究においても教育においても、当時の2大傾向に強い反応を示した時期であった。第1の傾向は、政治・経済システムの世界的な一体化という傾向である。もちろん、一方においてイデオロギーの対立が激化し、資源分布の不均等が深刻化していたわけではあるけれども……。第2の傾向は、学問研究において、研究者のもつ理念、用いる方法、研究の立場を第一義的なものとし、人間、社会、経済、政治についても、その抽象的な諸側面をより重要視する傾向である。数学的手法と一般法則を武器とする自然科学の1930年代以降の素晴らしい成功は、社会科学の研究者を同様の方向へ引きつける結果をもたらした。彼らは、自然科学流の抽象的思考と数学的（少なくとも計量的）手法を用いることで、みずからの問題に効果的に答えようとしたのである。これら2つの傾向のおもむくところとして、孤立的な事象や局地的、地域的な多様性への関心は背後へと押しやられ、抽象化、計量化に適した現象、すなわち、一般的に適用できる仮説や理論に、直接結びついた現象に興味集中した。

1950年以降、一般原理の追究を重視し、個別事例を軽視する風潮が、人文地理学ではっきりとしてきた。しかし、個別的な事例は世界が多様であることの具体的な表現である。世界がもし一様ならば、科学としての地理学は存在理由を失うのではなからうか。空間分布と空間組織が、明解な一般法則によって真に規定されているならば、地理的分布事象の説明には、地球物理学、生物学、人口学、経済学、社会学などの系統的学問だけで十分であろう。だが、現実世界はまさに逆で、多様な地域への分化はかつてないほど進み、特に人文現象についてはそれが著しい。今日、人文地理学に対する関心は、30年前、60年前に考えられなかったほど強まっている。その背景には、地域主義の高まりがあり、また局地的、地域的状况に対応した政策プログラム作りの必要性の高まりがある。

しかし、このような要請に対して、人文地理学は、もっぱら定量的に測定しうる現象相互の普遍的関係の解明を志向することによって、ひたすら一般的定式やいわゆる「数学」モデルなどといった抽象的言語で答えようとした。一般的有効性をもつ抽象的方法へのこのような思い込みは、地理学者のみに見られたことではない。抽象的方法は、長い間自然科学の専有物であった。それが、1945年以降、（言語学や歴史学をも含む）人文・社会科学を捉えたのである。当時の先端的科学思潮に触れた者にとって、科学研究の流れがそのような方向を目指していることは、すでに第2次世界大戦中から明らかであった。1940年から1955年までの大半をアメリカ合衆国の研究所および研究グループに所属したことで、筆者はこのような特権的立場を享受することができた。「人文地理学の分析方法について」と題した論文（*Annales de Géographie*. 1947年1月号発表）は、この新思潮について述べたもので

あったが、同僚の地理学者、特にヨーロッパ在住の地理学者の大半にとっては、さぞ不思議な議論に見えたことであろう。当時、筆者は新しい潮の流れを感じ、それを記述した。しかし、今になってみると、まだその時には、新しい流れの真の原因、すなわち、地理学研究の対象を根本的に変質させるべく作用していた諸々の要因を、筆者自身、明確には理解していなかったことがよくわかる。

一般化、抽象化を重視する傾向に対し、現在なお根強い力をもつ見解として、次のような説明の仕方がある。すなわち、このような傾向は、原子核物理学、電子工学、生化学、遺伝学、天文学など、自然諸科学の大きな進歩に対して、かつて「道徳・政治」科学と呼ばれた諸分野の学者たちが賛嘆の念を抱いたことの論理的帰結だ、というのである。だが、この考え方は、新しい流れの過小評価につながる。もちろん、最近50年間における応用、理論両面での自然科学の驚くべき成果が、そのような感情を引き起こしたであろうことは論をまたない。しかし、前世紀にも自然科学の進歩は著しいものがあつたし、それに対する社会科学の反応は、慎重かつ緩慢であつたことを思い起こすべきであろう。むしろ、1945年以降の動きがかくも活発で急速であることについては、20世紀の中葉が、社会の根本的な転換期であることにその原因を求めるべきなのである。とりわけ、この転換の影響を最も大きくこうむつたのは、現代世界の日々の機能構造であり、人文地理学がそれに強い反応を示したのは、けだし当然のことと言える。実のところを言えば、反応の強さはまだまだ不十分だし、反応の仕方にしても、地理学者にとって最も有利なものとは言い難く、また現代という困難な時代に際して、地理学が適切に貢献できるような方向にも向いてはいないのである。

II 空間の組織化と分断

全世界の統合という点において、20世紀の中葉は、人類の歴史上きわめて重要な発展段階を画した。統合化への歩みは、世界の多様な地域間で交流のネットワークが形成され始めた遠い昔にまで遡ることができる。しかし、大きなスケールでの空間の組織化は、地理上の大発見や、15・16世紀におけるポルトガルの海外発展によって加速度的に進行したものである。その後は、海においても陸においても、ヨーロッパが全世界の主導権を握り、ビクトリア女王の時代には、全世界スケールでの商業・政治組織がイギリスの手で完成された。そして20世紀に入り、第2次世界大戦の直後になって、アメリカ合衆国の卓越性が地球上のすみずみにまで浸透し、世界全体の組織化がまさに成就したかのごとくに至つたのである。広大な国土の組織化と、商業・金融面におけるイギリスの遺産の活用とによって、アメリカ文明は、世界空間の組織化にかつてどの国も持ちえなかつた能力と野心を所持していた。実際のところ、20世紀世界の形成におけるアメリカ人の最も大きな貢献は、疑いもなく、企業と政治と空間に関するその組織技術なのである。あらゆる科学、あらゆる技術が、人類の統合、組織化のために使われ、改良された。

世界の統一化という古くからの人類の夢の実現に際して、アメリカのはたすべき役割は、すでにアレクシス・ドゥ・トックヴィルの名著「アメリカの民主主義」（1835年初版）、とりわけその第1部の結論で、見事なまでに分析、把握され、展望されている。

中世は細分化の時代であった。各民族、各地方、各都市、各家族は、しだいに自己の個性を強め、たがいに反発し合った。今日では、逆の傾向が感じられる。諸民族は統一の方向に歩んでいるように見える。地上でどれほど遠く離れていようとも、各民族はたがいに情報の絆で結ばれている。人類は1日たりとて、たがいに赤の他人でいるわけにはいかず、地球のどこか片隅で起きていることに無知でいることもない。(中略) この同化傾向は、異なった民族をたがいに親しませ、ましてや同一民族の子孫が疎遠になることを妨げる。

それゆえ、いつの日か北アメリカには、たがいに同じ家系に属し、同じ言語、宗教、風俗、文明をもち、考え方が同じ型で、同じ色彩を帯びる、相互に対等な1億5千万の人々が生活することになるだろう。

アメリカ合衆国の人口が1億5千万に達したのは、奇しくも1950年であった。この年、国家としてのアメリカの一体性と、世界におけるアメリカの卓越性は、その頂点に達した。テレビが一般大衆に普及し始め、アメリカ系多国籍企業はすでに世界の大半をその活動領域としていた。だが、上記の引用文に続く文中で、トックヴィルが、諸民族の統合とともに、その分裂を予告した時、彼の予言はさらに輝きを増すのである。

今日、地球上には、出発点こそ異なるが、同じ目標に向かって進みつつある2つの民族が存在する。ロシアとアングロ・アメリカである。(中略) 主たる行動規範は一方が自由であるのに対し、他方は隷属である。(中略) しかし、いずれの民族も、神の隠れた摂理によって、いつの日にか地球の半ばをその手に握るべく、運命づけられているように見える。

しかしながら、かくも洞察に富み、いく度でも引用されてしかるべき上記の結論の前章において、トックヴィルは、いくつかの異なった人種がアメリカに存在し、その置かれている状況があまりにも不平等なことを論じている。彼はこの問題に対立と分割の源泉を予知したのである。それは、すでに地域的な様相を示しており、大国アメリカの内側で北部と南部の分化をもたらしていた。広大なモザイクである全世界を統合する過程においては、諸民族間の協調と相互理解、高度な技術の活用、全体の利益を考慮する新しい国際秩序の確立などが必要である。しかし、何が利益であり、また何が最も有利であるかについての考え方や感じ方は、個人により、また社会階層や経済集団によって、さらに国家間においてかなり異なり、しばしばたがいに対立し、衝突する。いかに理想的なものであれ、新しい秩序が課する制約は、多くのものたちの反発をまねく。彼らはそれに不賛成の意見をもち、そこから脱け出したいと考えるようになる。逆に、全世界の協調によってもたらされる相対的な安定は、あるものをして不相応な利益の追求へと向かわせ、局地的、地域的な自己主張の高まりをまねきがちだし、そのもたらす悪影響は広範におよぶ。それゆえ、新しい秩序の確立を目指すあらゆる努力は、必ずそれに対する抵抗と、秩序の変質をはかる試みとを引き起こす。多くの場合、それらは地域的ス

ケールの現象であるが、同時にシステム全体に対する大きな混乱要素となる。1960年以後、世界の統合と組織化はいくつかの側面（特に運輸、通信、貿易、人や情報の流動、金融、衛生などの部門）で大きく進展してきた。しかし、その反面において、地域主義や個別集団の自己主張が、世界のあちらこちらで頭をもたげ、かつてないほどの高まりをみせている。

このように、地理空間の組織化への動きは、二重の性格を有している。一方において、世界スケールでの地域間結合の強まりは、統一的で調和的な空間組織の形成を促進している。しかし、他方においては、同じ地球空間で分割の強化がみられる。地球空間の分割は、政治や文化の側面に関してより顕著である。これに対し、経済や技術の側面では、危機がいく度か訪れたものの、現時点においては統合的組織化への流れが卓越している。表面的には矛盾し、現実においては分かち難く入り組んでいるこれら2つの流れは、アメリカの事例が先駆的に示しているように、その後の世界で徐々に勢力を強めてきた。この150年間に書かれた数多くの著作が、それを如実に物語っている。H. G. ウェルズの「熟睡者の目覚めし時」（1899年）、イタリアの歴史学者フェレーロの「世界の統一性」（1927年）、アメリカの政治家ウィルキーの「一つの世界」（1946年）などは、その好例であろう。ウィルキーの著作は、彼のみた当時の潮流を記述したもので、超大国アメリカのその後の政治目標の1つとなったものである。この同じ潮流を記述し、分析し、展望した類似の著作物は、あらゆるジャンルにわたって、この150年間で数えきれないほど存在する。

Ⅲ 地域の編み目

2つの流れが錯綜し、変転著しく進化していくという、前節で述べた展望に立ってはじめて、20世紀後半における人文地理学の動きが、正しい見通しをもって理解される。緊密な構造をもった1つのシステムへと全世界が統合されていく動きは、一般理論の追究にはずみを与えた。かつて主流であった地域の記載と分析は打ち棄てられ、代わって一般的に適用可能な定式づくりが、地理的事象の立地や分布の分析、さらには異なった属性間の相互作用や関係の分析において重視された。一般理論の追究に際しては、現象の評価に一定の客観性が要求される。定量的な測定、統計的な検証への努力は、ここに根源をもつ。そのために、他の人文・社会科学と同様、人文地理学は自然科学を模範としたのである。このようにして、いくつかの興味深い概念とモデルが成果として得られた。しかし、根本的な原理や、世界中に適用可能な法則が、全く得られなかったことも事実である。事象間相互の関係は、国の違い、文化圏の違いによって、その内容が大きく異なるばかりでなく、同じ国においても、時代の移り変りに応じて変転が著しい。

一般的な説明のための理論を求める努力は、一部の地理学者を経済原理、さらには政治イデオロギーへと向かわせた。しかし、これらの試みはいずれも、環境とその変化が決定的に重要であるとの認識を単に強めただけに終わった。多様で変転きわまりない環境にあって、安定の拠り所、もしくは変化への歯止めを形づくっているものは、どれも文化の多様性と結びついている。言葉をかえると、人文地理学は、「文明」や「地域主義」、中心対周辺の対立といった概念へ、さらには、今やかつてないほど強力で明確な「ネットワーク」という概念へ到達したのである。捨象できると考えられた「地域差」

は、実は社会組織の根本原理に他ならないことが、少しずつ明らかになるうとしている。このことは、単に人文地理学のみにあてはまるばかりでなく、政治学、社会学、経済学、人類学においても同様である。

地域差を議論する際に、「地域」(région)概念の使用を避けて通ることはできない。région は元来、政治権力や行政当局による地理空間の分割を意味する概念であった(ラテン語の *rex*「領主」、*regere*「統治する」に由来する)。「地域」は、文明や生活様式などの過去の遺産の相続者である。しかし、単にその場所の過去だけが問題なのではない。ある地域の歴史は、どんな場所、どんな集団や個人の歴史におけると同じように、その地域が過去に外部世界と保持してきた関係システムによっても規定されている。かつてクロード・ベルナルは、生理学の分野において、2つの環境を明確に区別することの重要性を強調した。内部環境と外部環境とである。ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュは、国家についても同様のことを主張した。そして、外部世界のもたらす衝撃や外部世界との交流が、きわめて大きな役割を演ずることを述べ、孤立のもたらす危険性を指摘した。フランス地理学派による著名な地域モノグラフィーの数々は、当該地域の内部環境を、自然的基盤、歴史、社会などの諸側面から、細心の注意をもって考察したものであった。これに対して、外部環境の影響は、もちろん触れられてはいるが、たいていの場合、周辺的なテーマにすぎなかったと言える。しかし、世界の統合が進んだ今日の状況下では、あらゆる地域が地球的な交流ネットワークの一部に組み込まれており、いかに小さな地域であれ、世界システムの動向が、その地域の動態を規定する大きな要因となっている。それゆえ、2つの環境は、両方ともに十分に吟味されるべきである。地域の理解に際しては、その地域が組み込まれている複雑多様でかつ変転著しい広域システム(今日では往々にして世界システム)全体の中で、その地域の位置づけを明確にすることが不可欠なのである。

このことの、人文地理学にもたらす帰結は著しく大きい。すなわち、第1に地域分析、地理分析の脱局地化、一般化がもたらされる。もっとも、これは、個別事例研究の放棄を意味するものでは決してない。重要なことは、個別事例の研究に際して、あらゆる側面(気候から政治、金融にいたるまで)で、外部関係ネットワークの分析を導入することである。2つの環境の相互作用を把握することは、局地的事象のみの分析に、きわめて多くのものを付け加える。もちろん、過去においても、ごく稀な孤立状況を除けば、外部関係ネットワークの役割は、地域の動態にとって常にきわめて重要であったろう。しかし、20世紀の今日、そして来たるべき将来において、人類の居住する世界が、ある面で分断され多様ではあるにしても、ますます緊密な連続した編み目に組み込まれていく事實は、地域存在におけるネットワークの役割を著しく増大させている。

「幸いなるかな、ユリシーズのごとく美しき旅をせし者」。かくしてユリシーズは、出身地のローカルな環境と周辺の広い世界とを、ともに深く知ることを得たのである。人文地理学もまた、大旅行を経験してきた。従来ほとんど知ることのなかった一般理論の世界、イデオロギー対立の世界、そしてまた経済学や社会学など、隣接する社会科学の世界を経回ってきたのである。それを通じて人文地理学は、少しずつではあるが、より複雑でより多様な世界を、同時にまた、かつてないほど統合された世界を認識するようになった。人文地理学は新しい課題に取り組み始め、研究のリズムは活発化し

ている，ユリシーズの旅は続くのである。

(手塚 章訳)

〔編者注〕オックスフォード大学，地理学教室主任ジャン・ゴットマン教授は，日本学術振興会の外国人招へい研究者として，昭和57年4月1日から5月5日まで筑波大学に滞在された。